文化服装学院　学校関係者評価委員会　報告書

文化服装学院　自己点検・評価委員会

平成 27 年 9 月 3 日

目　　次

1.　報告書骨子　2

2.　学校関係者評価委員による文化服装学院自己点検・評価に対する総評　3

3.　学校関係者評価委員による文化服装学院自己点検・評価の重点評価項目への提言

1)　課程及び学科の教育理念、人材育成像の明確化　4

2)　キャリア教育、キャリア支援、進路・就職への対策　5

3)　退学者への対策と学生募集広報の検討　6

4.　学校関係者評価を受けて　7

学校関係者評価委員会開催日程　8

1.　報告書骨子

学校関係者評価委員会（以下、当委員会）は、文化服装学院学校関係者評価委員会規程に基づき、平成25年4月1日に設置した。文化服装学院（以下、本学院）の自己点検・評価の結果について客観性と透明性を高めるとともに、学外の関係者から専門的な助言を得るため、外部評価を実施する機関として当委員会を組織した。

当委員会は、本学院の自己点検・評価を資料として、自己点検・評価委員会の内部評価を参考にし、さらに関係教職員との具体的な意見交換等を通して、本学院の学校運営・教育活動について検証・評価及び助言を行うことを目的として実施している。当委員会委員は外部委員のみで構成され、本学院の教育理念を理解し、人材育成等に精通した学外の関係者の中から学院長が選考し、委嘱している。委嘱された委員は下記のとおりである。

平成27年度は、平成26年度の自己点検・評価報告書を資料として、当委員会としての評価・助言を取りまとめ、本報告書を作成した。本報告書に記載した評価・助言は、具体的な事項であり、より本学院の発展に資するという考え方に則り、過度に要約することなく記載している。

本報告書の作成にあたり、当委員会の委員の方々には、お忙しいところご尽力いただき、改めて深く感謝申し上げる。

記

委員長　　徳岡敬也（株式会社トークス　代表取締役）
副委員長　芦川照和（SUNデザイン研究所　プロデューサー　・　本学院卒業生）
委員　　山内　誠（一般財団法人日本ファッション協会 企画事業部　部長）
委員　　中村善春（(株) 繊研新聞社 事業局長代行
JFW-IFF/PLUG IN事務局長　アッシュ編集室長）
委員　　澤田勘志（株式会社MORIパーソネル・クリエイツ　代表取締役副社長）
委員　　磯貝章弘（株式会社東京ソワール　常勤監査役）

以上

2.　学校関係者評価委員による文化服装学院自己点検・評価に対する総評

本年度の自己点検・評価ではこれまでに挙がった問題点、課題を精査し、その改善に向け取り組んでいる現状がうかがえる。それ故に文化服装学院としての共通の問題点も見えてきているのではないかと感じる。各課程、各部署単位での取り組みに終始せず、横断的な検証・取り組みが求められる。

既にカリキュラム編成においては、各課程の特色という視点とは別に、全ての課程におけるファッションビジネスの授業において、IT の活用やマーチャンダイジングの重要性を鑑みた内容を盛り込んでいる点は適切な対応と考える。

学校として「グローバル化」は各視点において今後の具体的な対応を検討する必要性がある。授業内容、学生対応および学生募集とそれぞれに対策をたて、さらに推進してほしい。

文化服装学院の卒業生という大きな財産の活用はグローバル化への対策にプラスアルファの要素となりうる。また言うまでもなく、産業界との太いパイプとして、実践的な教育へ活用し、結果、産業界のニーズに即した人材育成につなげてほしい。

総じて現代の若者は課題解決力、コミュニケーション力、他者を巻き込むバイタリティが希薄になっている。そのことが、中途退学等の修学に関わる問題や、就業にも大きく影響しているといえる。これらの問題解決のためには学校は理想的な解決策を模索するのではなく、半歩ずつ進んでいくような地道な取り組みが必要であろう。

3.　学校関係者評価委員による文化服装学院自己点検・評価の重点評価項目への提言

平成 26 年度自己点検・評価において本学院が重点項目として掲げている 3 項目について委員からの提言は以下の通りである。

1)　課程及び学科の教育理念、人材育成像の明確化

［本学院の現状］

平成 25 年度に実施した自己点検・評価並びに学校関係者評価委員会からの評価においては､4 つの課程､さらにそこに含まれる細分化された学科ごとの教育理念、人材育成像が明確でないものがあるとの指摘を受けた。この点を改善すべく本年度これらを整理し明確化に努めた。結果、平成 26 年度の自己点検・評価では各課程の方向性や違いが分かりやすく整理され、外部、特に志願者にも理解しやすいものに改善されてきている。

［学校関係者評価委員からの提言］

(1) 服装造形を中心に学ぶ服飾専門課程とファッション工科専門課程との違いが明確に打ち出されて、入学対象者は課程、学科の選択が以前より容易になった。
(2) 各課程が打ち出す専門性向上の観点からの教育理念および人材育成像は理解しやすいものになっている。しかし目標としている「人間力」にはその具体性が乏しい。
(3) グローバル市場への進出においては英語を中心とした語学力向上にも留意するべきである。
(4) ファッションビジネスの場面においては、販売職がキャリアプランの基盤となる事を示す必要がある。
(5) デザイナーやパタンナーのような技術系専門職の養成においては、職人的資質の向上に加え、ライフスタイル全般をとらえる能力も必要となる事を留意するべきである。
(6) 授業内容（科目）によっては社会の変化が速い分野もある。企業の要請も注視し、時代に即した教育の提供が一層望まれる。
(7) ファッション流通専門課程においては新設の学科も含め、変化を反映した恒常的な見直しが必要である。

2) キャリア教育、キャリア支援、進路・就職への対策

［本学院の現状］

職業教育への評価が見直される昨今、専門学校はその中心となる教育機関である。実社会で活用できる実践的な知識と技術を身につけさせ、社会的、職業的自立に向け一人でも多くの学生を就職という形で送りだしていくことが専門学校の使命である。それゆえ、就職率向上のため弛まぬ改善と努力が必要と捉えている。その観点から本年においても本学院の重要課題の一つにするとともに、自己評価においては厳しく評価をしている。

［学校関係者評価委員からの提言］

(1) 現状のキャリア教育では、就職活動のための指導という点が重視されており、生涯にわたるキャリアプランの構築、人生と向き合う場となっているのだろうか。その点も重視する必要がある。

(2) ファッション業界においては販売職からスタートし、キャリアアップしていく現状を踏まえた指導が必要である。

(3) 専門学校は大学や大学院と比較してどのような違いがある人材を輩出できるのか。専門知識も必要な要素ではあるが、企業では社会人として最低限の教養も求められる。さまざまなカリキュラム編成の中では、リベラルアーツへの取り組みも見られるが、キャリア教育の一環として対応することも必要ではないか。

(4) キャリア教育としてビジネスのグローバル化へどのような対応をとっているかが見えない。

(5) 国内市場だけではビジネスは成り立たない時代になっている。語学教育を含め、世界との結びつきに目を向けた教育が必要である。

(6) 横断的なスキルとしてのコミュニケーション力に特化する共通科目の設置を提案する。企業においては日本人・外国人を問わず日本語の豊かな表現力は技術職、販売職や企画職でも求められる。言語・文字で表すスキルを学ぶカリキュラムの導入は就職活動にも有効的であると考える。

(7) 企業においては人間力が重要視されているが、本学院においては人間力とは具体的にどのようなものと捉え、取り組んでいるのだろうか。グローバルに活躍する人材育成と人間力の強化を柱としたキャリア教育が今後の課題ではないかと感じる。

(8) 本学院の学生の就職に対する意識は大学生と比較すると低いと感じる。学校を挙げて意欲向上に向けたより早期からの学生指導が必要だ。

(9) 問題解決能力や課題に取り組む過程における創意工夫など、自ら考え進む力を身につけさせる教育が求められる。

(10) 就職活動における資格取得の重要性・必要性が問われるが、取得するための勉強自体が重要であることを認識させる必要がある。

(11) 景気の変動は求人件数に影響する。景気が悪化した際の取り組みを学校として検討しておく必要がある。

(12) 留学生が増加する中、彼らへの就職支援はどのように取り組んでいるのか。日本での就職を望む学生も多い中、その実績が今後の学生募集にもつながる。また母国へ帰国して就業した学生の動向を把握できているのか。母国での就業実態も留学生の就職支援に役立つため、情報の集積が必要である。

3) 退学者への対策、学生募集広報の検討

[本学院の現状]

学生確保は重要な課題である。募集活動は年間を通じてさまざまなイベントを実施し、広報活動に努めている。

退学者対策にもつながることとして、入学前の広報活動の段階で、カリキュラム内容を詳細に開示し、具体的な学校生活を説明している。またファッション業界やその職種に対して志願者が抱いているイメージと現実の隔たりを少しでも埋められるよう努めている。

退学者数は専門学校としては比較的少ないが、7 月、9 月、3 月といった期の変わり目は高くなっている。

学校としては志願者の増大と、退学者の減少に高い目標をもって取り組み続けるためにも、重点課題として考えている。

[学校関係者評価委員からの提言]

(1) 学生の退学理由は額面通りではないであろう。その本質を探る学生対応が必要だ。

(2) 進路変更を理由に退学した学生のその後の進路を確認したことはあるだろうか。例えば意欲喪失の場合は、いつごろ、なぜファッションへの情熱を失ってしまったのかを掘り下げて確認しているのだろうか。実態を詳細に把握し分析することにより、表向きではない退学理由の本意が見えてくるであろう。

(3) 他の学科へ転科することにより、これまでとは違う視点でファッションを学び続けられるようなアドバイスをより積極的に行う必要がある。

(4) ファッション業界の動向が学生の進路選択にも影響していることは否めない。業界の隆盛も必要な要素である。

(5) 専門学校の強みは卒業後のキャリアが見えることだ。その状況をインターネットを通してより積極的に発信していくべきである。

(6) 入学者がどのようなメディアを重視したのかを調査し、次年度に生かしていく。
(7) 実施している個々の広報活動に対して、具体的な結果の分析がなされているのだろうか。
(8) 社会人、大学生、留学生向けのより積極的な広報活動が求められる。留学生はその出身国のバリエーションを増やし、インターナショナルな学園作りを目指す必要がある。

4. 学校関係者評価を受けて

学校関係者評価委員会の委員各位には、ご多忙の中委員をお引き受けくださり心より感謝申し上げます。外部の方々から学校運営ならびに教育活動に関し具体的な評価を頂戴することは今回で三度目となります。今回もファッション業界における製造部門、人事部門、メディア部門、プロデュース部門等の皆様から多岐にわたり、幅広い視野での提言を頂戴することができ、改めて外部評価の重要性を痛感しております。また、日ごろの文化服装学院の教育活動に対し、賛同と高い評価いただき大変ありがたく存じます。

平成 26 年度文化服装学院自己点検・評価における重点項目は昨年度のそれと等しく、職業教育を担う教育機関として取り組み続けるべき永遠の課題と捉えております。

これらの課題に対し委員の皆様方から頂戴した提言を真摯に受け止め、恒常的に検討し、時代、業界のニーズに応える人材の輩出につなげて参りたいと存じます。

また文化服装学院では創立 100 周年を見据え、永続的に教育活動を行っていくための様々な分野における再構築を昨年より着手しております。今回頂戴したご意見はそちらにも生かさせていただく所存です。

今後とも自己点検・評価ならびに学校関係者評価を継続し取り組んでまいりますので、皆様方のご協力を賜りたくお願い申し上げます。

ご尽力いただきました委員各位には改めて深く感謝申し上げます。

学校関係者評価委員会開催日程

第一回

平成 27 年 7 月 28 日（火）15：00～16：00

文化服装学院 C 館 4 階 C041 会議室

出席者（敬称略・順不同）

委員：徳岡敬也、芦川照和、山内誠、中村善春、澤田勘志、磯貝章弘

オブザーバー：小杉早苗、辛島敦子、野中慶子、平野栄子、宮原勝一、酒井英実、山田とし子、渡井邦重、山口容子、小林克也、宇都宮愛、横倉孝、須藤久栄、石崎克典、吉野真文、浜田法子、古澤直子

配布資料：平成 26 年度文化服装学院自己点検・評価

同　内部委員による評価表および報告書

学校関係者評価表

学校関係者評価委員名簿

平成 26 年度学科一覧

第二回

平成 27 年 9 月 3 日（木）17：00～18：30

文化服装学院 C 館 4 階 C041 会議室

出席者（敬称略・順不同）

委員：徳岡敬也、芦川照和、山内誠、中村善春、澤田勘志、磯貝章弘

オブザーバー：小杉早苗、辛島敦子、野中慶子、平野栄子、宮原勝一、酒井英実、山田とし子、渡井邦重、山口容子、小林克也、宇都宮愛、横倉孝、須藤久栄、石崎克典、吉野真文、浜田法子、古澤直子